

# 我が国におけるカヌースラローム競技の現状と課題についての研究

## A study of our country's present situation and problems on canoe slalom competition

1K05B140

谷口 和也

指導教員

主査 友添秀則先生

副査 杉山千鶴先生

### <序章>

#### 本研究の動機

私は高校に入りカヌースラローム競技を始めた。その後もカヌー競技を選手として7年間続けてきた。高校3年になった時に、ジュニア日本代表に選ばれジュニア世界選手権を経験した。結果は、惨敗であったが自分の世界での位置を知るとても良い機会となった。大学に入り競技を続けていった。大学2年からカヌースラローム競技の日本代表になり海外遠征に行くなどし、カヌーにのめり込んでいった。しかし、まだまだ、マイナースポーツであるため競技を続けることや、競技を続けるための環境が整備されていないといった現状が見えてきた。また、(社)日本カヌー連盟の活動がよいと感じる反面、不満に感じることも多くある。今まで競技を続けて疑問を感じたのが代表に対してのサポートや、カヌーの普及活動である。この問題点を明確にし、その解決策を考えていく。そしてこれらの、解決策をカヌーの普及活動に役立てたい。

#### 本研究の目的

日本におけるカヌースラローム競技の現状をヒヤリング調査等で明らかにする。また、社団法人日本カヌー連盟が行っている事業を調査する。また、問題点等をスラローム強化部長にヒヤリングを行う。スポーツ活動を条件づける3つの要素である、人、物、金、等について注目し、スラローム競技の普及に向けたカヌー連盟の事業改善策を考察する。

#### 本研究の方法

本研究は関連する文献の講読により行う。文

献での情報が不足している点に限っては、インターネットの情報を参考にする。また、(社)日本カヌー連盟関係者にヒヤリングを行う。

### <第1章>

#### カヌーの歴史

カヌーは、何千年もの昔から、人々の移動手段として、また狩猟の道具として発達してきた水に浮かべる小さな乗り物である。最も古いカヌーは6千年ほど前のユーフラテス川近くにあるシュメール人の王墓から見されている。スポーツとしての近代カヌーは、19世紀にイギリスで芽生え、1866年イギリスのテムズ川で初めてレースが行われた。1938年に日本カヌー協会が設立されたが、第2次世界大戦の激化に伴い、その活動は自然に消滅し、東京オリンピックも幻と化した。

戦後、国際カヌー連盟から離脱していた日本の復帰が認められ、1960年再び日本カヌー協会が復活した。1964年第18回オリンピック東京大会でフラットウォーターレーシング(静水面で行う)が正式競技として採用された事から、国内におけるカヌー競技は普及と強化の両面で大きく躍進したといえる。

日本カヌー協会は、東京オリンピック開催後、日本体育協会に加盟し、1980年に社団法人日本カヌー連盟へと法人化した。また1982年の島根国民体育大会から正式競技として実施されている。

### <第2章>

#### カヌースラローム競技の現状

日本におけるカヌースラローム競技の現状を知るために(社)日本カヌー連盟の行っている事業の調査をし、日本代表選手に次のヒヤリングを行う。質問は特に、自分の生活を犠牲にしながら競技に打ち込んでいることが判明した。次の質問を行った。?金銭的な援助があるか?スポンサーがいるか?指導者はいるか?競技に打ち込める環境にあるか。

### <第3章>

#### 今後に向けての改善点

スポーツ活動を条件づける3つの要素である、人(指導者・強化育成)、物(スポーツ施設等)、金(スポーツ財政)等について注目した。日本におけ

るカヌースポーツの位置づけは、マイナーである。そうなると、この3点の要素もしっかりしていない。この現状を変えるには早急に整備を図らなければならない。ジュニアの育成や、普及活動を行い底辺拡大をしていかなければならないと考える。

### <終章>

本研究を通して多くの問題を抱えている現状が見えてきた。クラブチームがほとんど存在しない日本では選手と日本カヌー連盟がよりよい関係となり連携をしていかなければいけない。その為には選手の現状、日本カヌー連盟の現状を両者が理解し意見を言い合える場を持つことが大切だ。それが普及、競技力向上につながると考える。